

震災から1年6ヶ月が経過しました。津波で押し流された現地は更地になったところもありますが大きな物は片付いたものの手つかずのままの状態で取り残されている所がほとんどです。ガレキの山の片付状態も地域による格差がかなりあることも目で見て分かります。

ボランティア活動も被災地のスタッフ機能の格差がそのまま実活動の格差に如実に現れ、活気溢れる活動ができていいる所と置き去りにされつつある所と2極分離されつつある気がします。問題提起したり見ているだけの活動では何も変わらないので、例え小さなことでも多くの人に呼びかけ支援できることを実施し、たくさんの人に発信し続けることがこの問題の解決方法の一つだと信じて活動していきたいと思います。

変わらぬご支援、よろしくお願いいたします。

“MIRAI ASBL プロジェクト” ベルギーホームスティのお手伝いをしました

東日本大震災遺児(孤児)のメンタルサポート&募金活動を行っている MIRAI ASBL が、夏休みのベルギー滞在体験と留学全面サポートを計画。この滞在体験は、震災遺児(孤児)の可能性を広げ、将来、被災地を引っ張る牽引役となるための広い視野と知識、そして広いつながりを持ってもらいたいとの考えに基づいてベルギー日本人会が中心となって立ち上げた復興支援プロジェクトでベルギー王女も応援してくれているそうです。

学校の先生の勧めもあり、募集枠10名の呼びかけに応じた中高生は岩手県、宮城県から4名でした。私は、物質支援でなく人材育成支援が大切という欧米の考え方に感銘したことと、孤児という逆境を乗り越えようと応募した子どもたちを是非応援したいと思い、それぞれの自宅から仙台空港までの送迎ボランティアをお引き受けしました。

7月20日、高校生2人が往きの車の中で、亡くなったお父さんのことも少し話してくれましたが、海外での生活への不安が大きいという印象でした。しかし、自分の意思で応募しただけあって芯の強さがあり、必ず、成長して帰ってくるだろうと思いつながりを見送りました。

7月31日、事前に MIRAI ASBL から子どもたちのベルギーでの生活や成長の様子を連絡して貰っていたので聞きたいことがたくさんあり、ワクワクしながら仙台空港に迎えに行きました。那須烏山市在住で今回のプロジェクトの中心的役割を果たしたベルギー人のダークさんも急遽同行しました。



7月20日仙台空港での見送り



7月31日笑顔で帰ってきました

4名の子どもたちは笑顔で帰ってきました。高校1年の女の子は、とても充実したホームスティであったことと、もう一度ベルギーに行って勉強して復興に役立つ仕事をしたいと話してくれました。そして、残されたお母さんに迷惑をかけたくないでアルバイトをして資金を貯めたいと話す姿を見て、人材育成支援という MIRAI ASBL の考え方の素晴らしさを改めて感じました。4名のこれからの人生が色々な分野で被災地復興の引き金的な人材になることを想像しながら各自の家まで送り届けました。

“MIRAI ASBL”の詳細はホームページを参照してください。<http://mirai-asbl.com/>

MIRAI ASBL 見送り終了後、宮城-福島海岸線を回って帰ってきました

7月20日16:00発成田行きの飛行機を見送った後、宮城県岩沼市→亘理町→山元町→福島県新地町→相馬市松川浦と大きな被害を受けた海岸線の道を回って帰ってきました。

震災から1年4ヶ月経過した海岸線は震災後3ヶ月経過時点からほとんど変化のない心痛む風景が続いていました。一番驚いたのは山元町の海岸線を走っている常磐線の踏切を渡る時でした。車のナビが「踏切に注意してください」と音声で伝えてくるのですが、どこが踏切なのか分からないのです。線路も電化用の鉄柱も全くないのです。この地域の復興の道のりが頭の中で描けませんでした。でも、私たちは出来ることを例え小さくても実践し、多くの人に発信し続けることが大きな力になると信じてやり続けたいと思いながら帰ってきました。



このような景色が延々と続く海岸線



ナビが教える常磐線だが…山元町

宮城県南三陸町のボランティア活動に個人参加しました

8月1日 MIRAI ASBL の子どもたちを自宅に送り届けた時間が真夜中の12時近くで場所が石巻市だったので石巻に宿泊し、小堀夫婦とダークさんの3人で南三陸町に足を伸ばしボランティア活動に参加しました。

急遽参加したダークさんは宿が取れず持参したテント宿泊でした。

南三陸町はメディアにもたくさん取り上げられていることとボランティアセンターのスタッフが充実していることもあり、とても多くのボランティアの方が来ていました。

関東から日帰りは難しいため、車中やテント宿泊で何日も10ヶ月支援活動が続けているそうです。連泊して活動している方が多く、皆さんのパワーに感心すると同時に頼もしくなりました。

ボランティア活動の内容はまだまだ手つかずの状態が残っている海岸清掃と農地復活のお手伝いが主なものでした。

私たちが依頼された仕事は、有志共同で野菜づくりを始めた星さんのビニールハウス内で小石を根気強く除去する農地復活の作業でした。



ハウス内は蒸し風呂状態でした



野菜づくりのリーダー星さんと

ボランティアセンターでの事前説明会



スタッフの長谷川さんは名古屋から来て

10ヶ月支援活動が続けているそうです

震災前、海岸近くにあったビニールハウスは全て流出してしまいましたが、山手の土地を整地しハウスを建て再建を図ろうと野菜づくり事業として始めたところでした。

真夏のビニールハウス内は将にサウナ状態です。そんな中でも多くのボランティアの皆さんは努めて明るく冗談を言いながら作業を進めていました。南三陸町まで連泊でくるボランティアの皆さんは人間的に素晴らしい人が多く、暑くて大変な仕事でしたが清々しい気持ちで活動することができました。

宮城県南三陸町の情景

震災後1年4ヶ月ほど経過した南三陸町の様子を紹介します。写真の通り、街の中心地は地盤沈下の影響もあり、復興の難しさを感じます。街から少し離れると他の被災地と同様の手付かずの風景が広がっています。対照的に美しいオーシャンブルーに輝く三陸の海がどこまでも広がっており一層心が痛みました。



まだ撤去作業が終了していない街の中心地
満潮時は写真の通り潮が満ちてきます



廃車の山がまだ所々に残っていました



穏やかで真っ青の海が広がっていました



街の中心地

応援ファンドの海の幸ウニが泊浜から届き始めました

7月にウニ漁が解禁になり泊浜から生きたままのムラサキウニがファンドのお礼として届き始めました。

去年までは一回の漁で100Kg獲れたそうですが、震災後は1/3位に減ったそうです。

ファンド協力者には感謝の気持ちを届けたいので一人当たり10ヶ送りたいと事前に責任者の平塚さんから連絡がありました。

経済支援が目的なのだから無理はしないで欲しいと話しましたが皆さんにどうしても感動を届けたいという彼の思いを受けることに



トゲが動く状態で届けられたムラサキウニ



しました。

ウニは本当に美味しく届いた皆様から平塚さんにお礼の連絡がたくさんあり、泊浜の仲間7名と共にとっても嬉しく皆様に感謝していますと私にも電話がありました。

残念ながら、獲る量に制限があり、今回は40名足らずで終了となってしまいました。

次は11月解禁のアワビだそうです。まだ届いてない方は楽しみにしててください。



海の幸が豊富な石巻市泊浜の風景

地元那須烏山市神長の土砂崩れ被災者の遺留品探しのお手伝い

栃木県の震災犠牲者4人の内、2人が地元那須烏山市の在住者です。被災された古谷さん(79)ご夫妻は震災当日、小学生のお孫さん2人と家にいて震災の揺れに驚き、外に出たそうです。突然襲ってきた土砂崩れでお孫さん2人は腰まで埋まりながらも自力で助かったことを家族の方から聞いて胸が締め付けられました。



復旧工事中の被災現場

平成 24 年8月31日(金)、古谷さんご夫妻の遺留品探しが家族の立会のもと実施され、私たち龍JIN もボランティアチームの代表として参加しました。

3. 11大震災後1年半が経過し、一つの区切りとして遺留品探しを実施する家族の思いに寄り添えたらいいなと思いながら作業に取り組みました。

どうしても探したいと言っておられたお母さんのバックは見つかりませんでしたが、お孫さんと一緒に撮った写真やアルバム数点が出てきました。

遺留品探しが震災後1年半も経過して初めて実施されるという月日の長さが今回の被害の大きさと深さを象徴していると感じました。

息子さんご夫妻と古谷さんのお姉さんから「1年半という時間の一区切りに合わせ精神的にも一区切りできました。ご協力ありがとうございました」とあいさついただいた時、ほっとした安堵と共に何の力にもなれない虚しさを感じました。



遺留品整理の様子



数点の写真

地元消防署の皆様を牡鹿地区に視察案内して来ました

9月9日(日)、署長及び団長を含む地元消防署の皆さん 15 名を石巻市牡鹿地区に視察案内して来ました。9月9日(日)は牡鹿中学校が運動会で、牡鹿ボランティアセンターのスタッフから昼食の炊き出しを手伝いながら現地の方と交流してみてはどうかと提案されました。

喜んで計画を組み、那須烏山市役所を出発しました。

出発直前にずっと交流継続中の石巻市荻浜から羽山姫神社祭典のお祭り案内が届きました。今までの交流活動を通しての信頼関係の賜と思いとても嬉しく受け取りました。

神輿が津波から奇跡的に助かり、昨年ボランティアの協力でお祭りが再開したことが地元のテレビ局で2回も特集で組まれるなど茨浜の皆様にとっては希望の祭りです。

幸いに開催が9月9日(日)と同じ日であったので牡鹿中の途中に立ち寄り、お祝いのお神酒を届けることにしました。祝い酒を我が町の造り酒屋に手配しましたが、造り酒屋の社長も自前の1本を提供してくれました。



希望のお神輿



持参したお神酒3本

東北の海岸地区のお祭りは海の幸の感謝と安全祈願のために神輿を船に乗せて神輿担ぎを実施するそうです。

私たちが茨浜に到着した時は、既に海から上がって仮設住宅に向かっていた。

茨浜の皆様から温かく迎えられました。がタイトな時間であったため挨拶のみの参加で後ろ髪を惹かれる思いで茨浜を後にしました。

牡鹿中に着いた時には、かなりの遅刻で炊出しは終了していました。申し訳ないことをお詫びし大漁旗の万国旗がたなびく牡鹿中を後にし「おしかのれん街」で黄金寿司の昼食とお買い物を消防署の皆様にも堪能してもらいました。



大漁旗が舞う牡鹿中運動会

<「がんばろう！石巻」看板前の石巻焼きそば店主尾形さん訪問>

帰る途中、石巻市門脇地区にある「がんばろう！石巻」の看板前で、奥さんを津波で亡くしてもB級グルメに出場するなど震災に負けるわけにはいかないと頑張っている前回号で紹介した尾形さんの壮絶な体験談を聞きました。

実は尾形さんの奥さん愛用の焼きそばのヘラが今年の3月末に偶然見つけた時、2番目の娘さんから「お母さんが焼きそば屋を続けなよと言っているよ」と言われたことで「いつまでもくよくよしていても始まらない、よし頑張ろう」と奮起して今があることなどを話してくれました。



壮絶な写真で熱弁する尾形さん

尾形さんのさし当たった望みは、この門脇の地で震災の話を多くの人に聞いてもらい交流できる「ありがとうハウス」建設と、今はトイレもないために立ち小便をしていく人が多いので水洗トイレの設置だそうです。この地区は水道も下水設備も全て流出してしまい、尾形さんの希望を叶えるのはかなりハードルが高いのです。それにありがとうハウスができて駐車場もないのでボランティアさんと協力して簡易な駐車場も作りたいと熱く語りかけてきました。

尾形さんにはこれからもずっと応援団となることと駐車場づくりのボランティア活動を計画することを約束して尾形焼きそば屋さんを後にしました。

なお、石巻焼きそば店主尾形さんについては同行した下野新聞記者により、大きな紹介記事[那須烏山の視察研修団 同行ルポ 石巻焼きそば店主尾形さん 妻の形見 手に再出発](平成24年9月12日下野新聞朝刊)として掲載されました。

記事は下記サイトを開いて見てください。

<http://www.shimotsuke.co.jp/town/region/north/nasukarasuyama/news/20120911/872998>